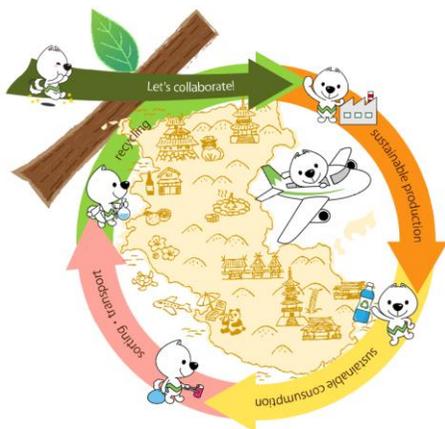


県民自ら取組む「和歌山らしい」資源循環



Outline

**ENEOS和歌山製油所の機能停止を機に、ビジョン策定。
和歌山らしいサーキュラーエコノミーの実現を目指す。**

【背景・経緯】

少子高齢化・人口流出といった課題を抱えつつ、重化学工業のウェイトが大きい産業構造の和歌山県。そのなかで、和歌山県有田市に立地するENEOS和歌山製油所での製油機能の停止が発表され、地域経済へ与える影響の大きさもあり、その活用が大きな課題となった（2023年10月に機能停止）。また、産業競争力強化に向けた次世代型の産業の創出・育成も課題となっていた。

【実施方針】

県では、ENEOSが進めていたSAF（Sustainable Aviation Fuel（持続可能な航空燃料））事業の検討とも連動しながら「わかやま資源自律経済ビジョン」を取りまとめた（2023年10月策定）。

「和歌山らしい」地域資源として、①使用済み天ぷら油、②排ガスCO₂、③廃プラスチック、④木質バイオマス（間伐材・剪定枝・農作物残渣等）、⑤ストックされている地域資源（空き家・廃校）、⑥地産地消が可能な循環資源（再生可能エネルギー等）を取り上げ、県民一人ひとりが資源循環を『自分事化』することを促し『和歌山らしさ』に主眼を置いた資源循環を通じて、自信と愛着ある和歌山を県民自らの手でデザインする姿の実現を目標として掲げている。その最初として、家庭用使用済み天ぷら油回収実証事業に着手した。また「一人ひとりがサーキュラーの『わ』の中へ『わ』から自信と愛着ある和歌山を自らデザインする」と掲げ、その『わ』を拡げていきたいと考えている。

県では、行政トップである知事の方針のもと、商工労働部と廃棄物行政を担う環境生活部とが強力に連携して事業を推進。また、基礎自治体との連携も不可欠と捉え取り組んでいる。

Point①

使用済み天ぷら油を回収し、SAF等の燃料へと利活用する仕組み構築を目指す実証事業により『自分事化』を促進

県内自治体（和歌山市、有田市、海南市など）と連携し、2024年7月より使用済み天ぷら油回収実証事業に取り組んでいる。一般家庭で発生した油は、専用のリターナブルボトル、またはペットボトルを使用し、スーパー、資源リサイクルセンター、公共施設、企業等に設置された回収拠点に持ち込み、回収される。収集運搬・再資源化については、県と連携協定を締結した植田油脂株式会社が行い、回収したリターナブルボトルは洗浄し、回収拠点に補充される仕組みとなっている。2025年2月時点で、回収拠点は5市町46拠点、回収量は毎月増加傾向にある。

回収された天ぷら油は、バイオディーゼルに精製し、回収トラックや重機、発電機などの軽油代替燃料として利活用するほか、将来的には、県内のSAF製造工場への原料供給を目指している。

『天ぷら油で飛行機を飛ばそう』と回収用ボトルにプリントするなど、夢のあるストーリーを訴求しつつ、県民が積極的に資源循環に関わり、「自分事化」していくことを促している。

Point②

ENEOS、花王、サントリーとの包括連携協定により事業推進

和歌山県とENEOS株式会社、花王株式会社及びサントリーホールディングス株式会社は、それぞれの資源及びネットワークを有効活用することにより、より強力に和歌山県におけるサーキュラーエコノミーの取組を進めるべく包括連携協定を締結。使用済み天ぷら油からのSAF製造及び製造時の連産品であるバイオナフサを利用した製品製造、ペットボトルの水平リサイクル、CCUS（Carbon dioxide Capture, Utilization and Storage）など、「わかやま資源自律経済ビジョン」の実現に向けた取組強化に向けた体制を構築している。

Point③

未来環境供給基地として生まれ変わる和歌山製油所エリア

今後、ENEOS和歌山製油所エリアは、石油基地からカーボンニュートラルを先導するGX（グリーン・トランスフォーメーション）モデル地区をめざす未来環境供給基地に生まれ変わり、SAF製造の拠点整備やカーボンニュートラルに関連する企業の誘致が進められる予定。

●天ぷら油の回収拠点



●ENEOS、花王、サントリーとの包括連携協定

